

クラゲ被害対策事業の進捗（8月末）について

1 要旨・目的

県東部海域のミズクラゲ（以下「クラゲ」という。）の漁業被害を軽減するため、ICTを活用してクラゲをモニタリングし、駆除に適した場所と時期を判断した結果、小型定置網（以下「定置網」という。）は5月中旬に、小型底びき網（以下「底びき網」という。）は7月下旬から8月上旬に駆除試験を実施したので、その結果を報告する。

また、10月以降に実施を予定している発生源となるポリプの生息実態調査について、今後の取組予定を報告する。

※ ポリプとは、卵から発生したクラゲの幼体が構造物などに付着した形態をいい、その後分裂・増殖して春にクラゲとなる。

2 現状・背景

近年、県東部海域を中心としたクラゲの大量発生に伴い、漁獲した魚の品質低下や、漁網の破損及びその修理など、様々な被害が生じている。

こうした状況の中で、今年度は船に備え付けた切断機などを使って駆除方法の実行見通しを調べるとともに、発生源のポリプ対策と併せて、効果的な駆除や発生抑制の手法等を検討する。

3 事業の概要

(1) 対象者

福山地区漁業者（定置網 37 経営体、底びき網 106 経営体等）を中心とした県東部海域の中小漁船漁業者

(2) 実施状況と今後の予定

ア クラゲ駆除を効率的に行うための ICT の活用

(ア) クラゲのモニタリング

令和6年4月から、底びき網業者3名と定置網業者7名により、ICTを活用してクラゲの入網量の情報をモニタリングした。その結果、定置網では4月中旬から漁業への影響が確認されはじめ、5月後半からは操業を早めに終漁する漁業者が見られた。また、底びき網でも、5月上旬から漁業への影響が確認され、7月から8月前半にかけてその影響が大きくなった。

(イ) 駆除試験の実施時期と場所の決定

漁業者団体が、クラゲのモニタリング情報を基に、定置網では田島漁協及び千年漁協の2箇所で5月中旬に1回、底びき網では田島南沖海域（図1）で7月下旬から8月上旬にかけて3回駆除試験を実施した。

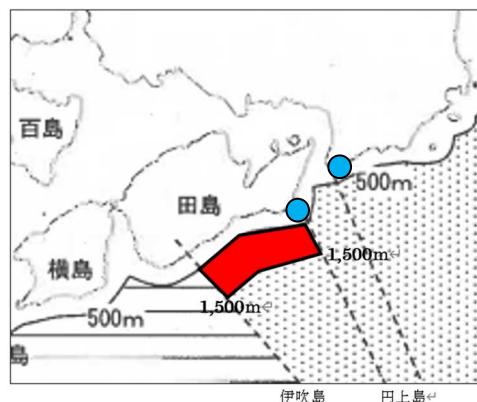


図1 定置網及び底びき網による駆除試験場所（青丸：定置網、赤区域：底びき網）

イ 専用器具による定置網及び底びき網における駆除試験

クラゲを簡易に切断できる金属製のカッターの付いた専用器具（通称：クラゲカッター）を用いて駆除試験を実施した。

（ア）定置網

網に入ったクラゲをノリ刈取り船のポンプで吸い上げ（写真1）、クラゲカッターを通して切断しながら海に戻す試験を5/17に実施した。その結果、クラゲを駆除するのにかかる時間は、定置網1箇所当たり数分で駆除できることがわかった。



写真1 定置網によるクラゲ駆除（袋網にたまったクラゲをポンプで吸うところ）

（イ）底びき網

底びき網漁船16隻による7/25、8/1、8/8の3日間の駆除試験で、約18 m³のクラゲを駆除した（写真2）。日ごとの駆除量は、それぞれ6.0 m³、6.2 m³、5.9 m³であったことから、安定的に駆除が実施できた。

これらの試験による駆除の効果は明確ではないものの、8月後半以降はクラゲの混獲は減少しており、漁業の影響は少なくなった。



写真2 底びき網によるクラゲ駆除（バケツで計量後、カッターで粉砕）

（ウ）次年度に向けた取組

次年度は、今年度の駆除方法を用いて、駆除による効果を検証することを目的に、モニタリングを実施しながら駆除の時期や規模を漁業者と調整する。

ウ ポリプの生息分布調査の手法や対策の方向性

まずはポリプの生息場所を明らかにするため、その判定方法の確立を目指して、専門家に助言をいただきながら、10月頃に福山市沿岸の4箇所程度で水中ドローンや潜水士による生息分布調査を試行する。

また、ポリプから形態変化して発生する「エフィラ」についても、1月以降に福山市沿岸域でサンプリング調査を実施することにより、ポリプの分布を推定するなどの検討を行う。

※ エフィラとは、ポリプが形態変化をして海中に浮遊し始める大きさ3mm程度の形態であり、その後成長して春にクラゲとなる。

(3) スケジュール

- ・ ポリプの分布調査：10月中下旬
- ・ エフィラ調査：1～3月に6回程度（専門家による研修を含む）
- ・ 専門家らとの駆除方法の検討：12～2月

(4) 予算（単県）

9,000 千円